



なぜか牧野富太郎と縁がある。といっても、たあい
ないことで、もの心ついたころ、我が家の数少ない蔵
書の一つが『牧野日本植物図鑑』だった。黒っぽい、
ぶ厚い本が本箱のすみに収まっていた。幼いころに取
り出して、こわごわ開いてみたことがあるが、茶ばん
だ紙に草花の絵と説明が際限なくあるだけで、すぐま
た閉じて元のところにもどしておいた。

のちに植物学で名をなしたような人は、きまつて幼
いころの「牧野」体験を口にする。家にあった『牧野
日本植物図鑑』をあかずながめていて、草花の名前を

『牧野日本植物図鑑』 牧野富太郎著 北隆館

初版の説明文は文語体だった。「花卉ハ五片ニシテ
長楕円形ヲ呈ス」といったぐあいだ。それにしても、
どうしてタイトルに「牧野」がついているのだろうか？
下に「牧野富太郎著」とあるから、わざわざことわら
なくてもいいような気がした。よくいわれていたこと
だが、牧野富太郎は学歴のない身で学者世界に一步も
引かず、個性ゆたかに生きて、前人未踏の植物分類学
を打ち立てた。その強い思いがタイトルの「牧野」に
こめられているのだろうか。

パラパラとページをめくってわかったのだが、
巻末にへんなものがくっついていて見出しに「警
告」とある。「従来無断で我が図を剽窃し、或は変造
して自分の著書に乱用せし不徳破廉恥の無学漢があつ
て……」

以後もその種のことをなす場合は、すぐさま名前を
公表するからこころしておけ……。ふつうは巻末に
「不許転載」といった表示が小さくつけられるが、こ
こではそれが一ページをとっており、一般の人ではな
い、特定の誰かにあてたメッセージらしいのだ。カビ
た匂いのする初版本を元のところにもどしながら、何

おおかた覚えてしまったというのだ。そういう珍しい
少年もいたにせよ、たいていはプロ野球の選手の名は
覚えても、アケビやレンゲソウには、さっぱり興味を
示さない。そして私はあきらかにプロ野球型だった。
ただずつとのち、もう野球選手も卒業した年ごろに
なつてからだが、郷里の家で何の気なしに牧野の図鑑
を取り出して、それが昭和十五年（一九四〇）に出
ていることに気がついた。いわゆる初版であつて、偶然
ながら自分と誕生の年が同じではないか。あらためて
タイトルを見直した。

やら釈然としない気分があつた。

とはいえ、そんなことはすぐに忘れた。さらにのち
のことだが、話をたのまれて高知へ行った。講演の前
の時間つぶしに町を歩いていると、「高知県立牧野植
物園」の標識が目にとまった。

「牧野富太郎植物画展―ボタニカルワールドへのいざ
ない」

とりわけ新種を見つけたときなど、学者はそれを図
解して紹介する。たいていは画工にたのんだが、牧野
富太郎は自分で描いた。実用的な科学図にあたるが、
牧野画は並外れて美しい。人はそれを「神業」と呼ん
だ。いかにも神業的絵図であつて、おもわず次の予定
も忘れて見とれていた。

さらにべつときだが、高知県を流れる仁淀川によとの取
材に行つた。用をすませたあと、佐川さかの町が近いと聞
いて足をのばした。元陣屋町というが、三方を山に囲
まれた小さな趣のある町である。仁淀川の支流の柳瀬
川が流れていて、清流を利用して酒造りがはじまり、
銘酒めいしゅ司牡丹しみづたんの里で、狭い地形に白壁の酒蔵が軒をつら
ねていた。

そんな町の小さな公園に、「牧野富太郎生家跡」の